

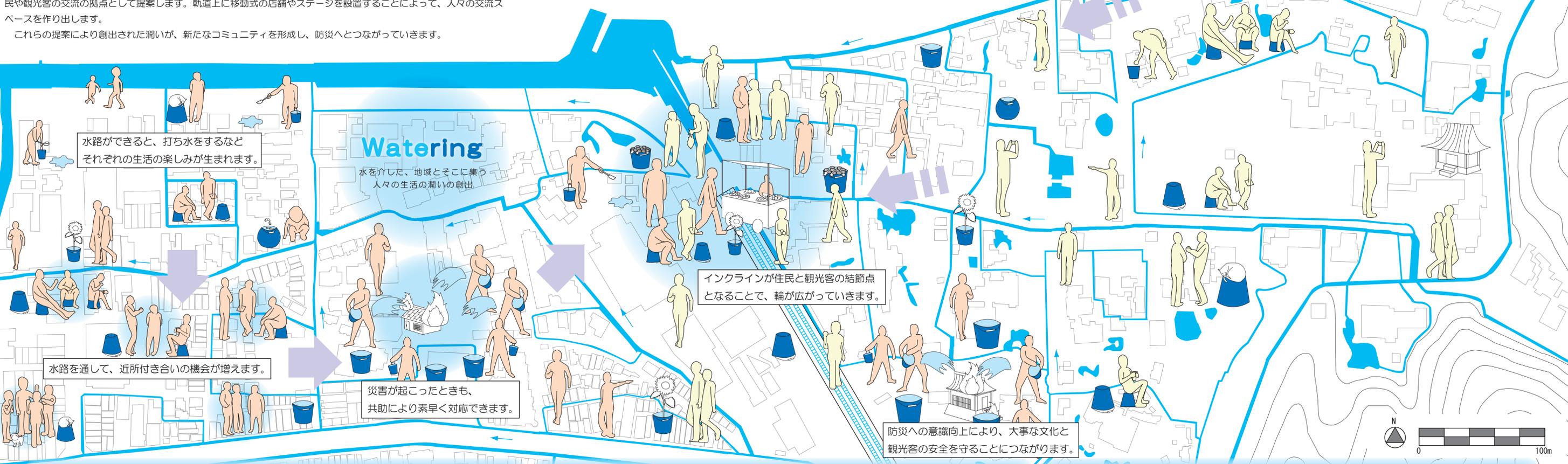
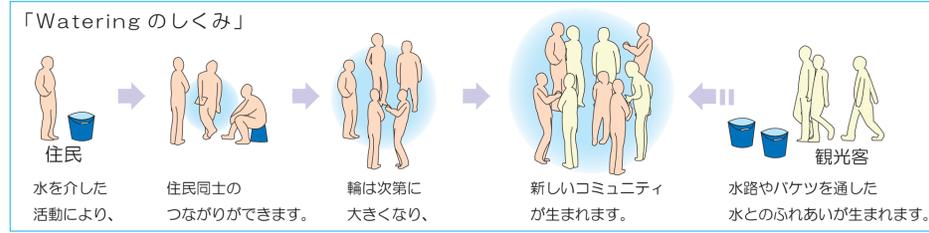
Watering

～水路の顕在化による新たなコミュニティの創出、そこで育む防災意識～

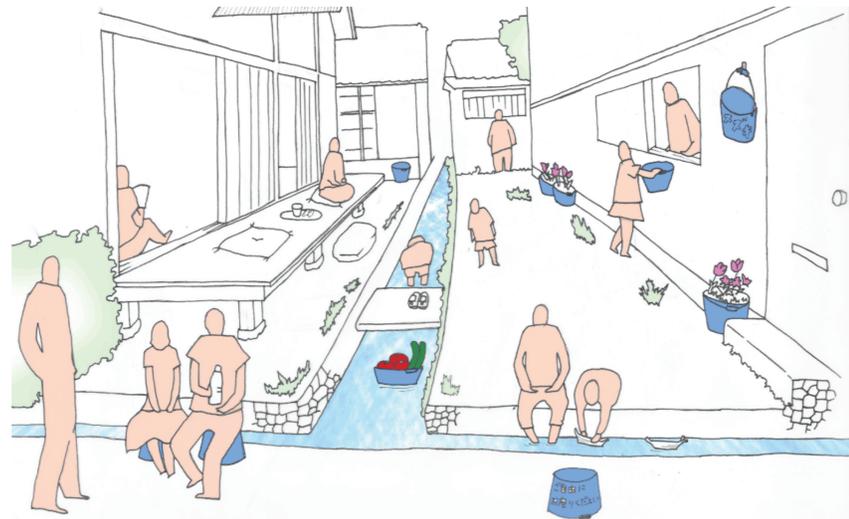
対象地には琵琶湖疏水を始めとする京都の近代化に貢献してきた遺産が存在します。建設当初は、水運などに使われ、人々の生活を潤してきましたが、時代が変わるにつれ水運はなくなり、上水としての利用が主になってきました。また水路の多くが暗渠化しており、住民が疏水の恩恵を感じにくい現状があります。

この課題に対して私たちが提案するのは「Watering：水を介した、地域とそこに集う人々の生活の潤いの創出」です。これは目に見えない水路を顕在化し、人のつながりを生み出そうというものです。平常時は、住民同士、それに観光客も交えた交流の場となり、同時に災害時の共助の意識を生むきっかけとなります。災害時には水路の水が初期消火や延焼の防止に役立ちます。その水を使うツールとしてバケツの利用を提案します。これは単に消火に使用するだけでなく、普段はベンチとして使えるなど様々な機能を有しています。また、住宅地と観光地の間に存在するインクラインを、住民や観光客の交流の拠点として提案します。軌道上に移動式の店舗やステージを設置することによって、人々の交流スペースを作り出します。

これらの提案により創出された潤いが、新たなコミュニティを形成し、防災へとつながっていきます。

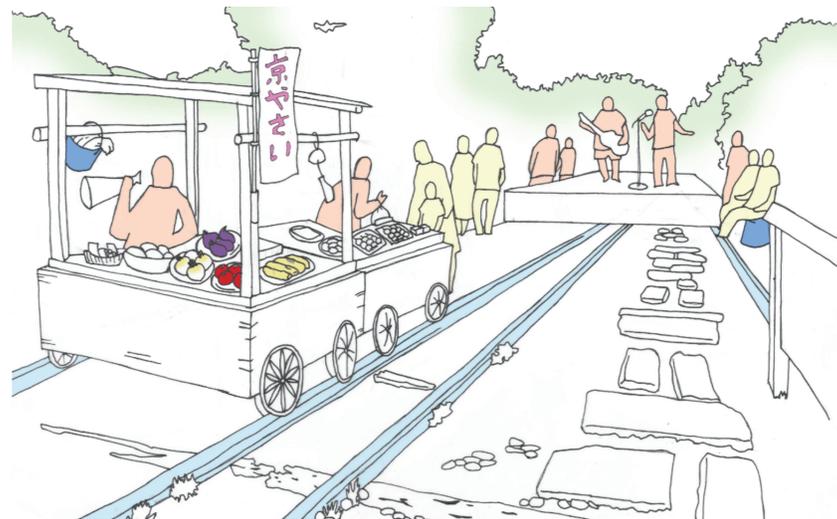


水路とバケツのある風景



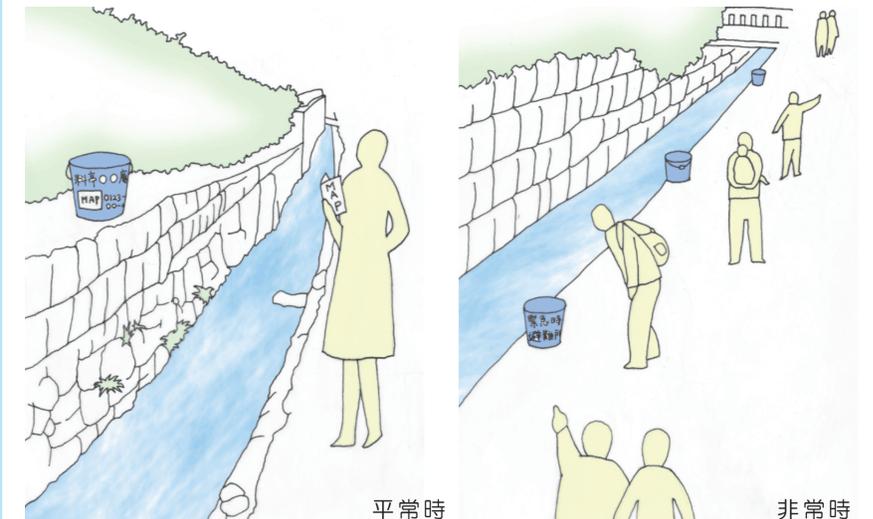
住宅地に新たな水路を引くことによって、人と人との交流を生み出します。例えば、打ち水をしたりモノを冷やしたりするといった利用や、子供たちの遊び場や親水スペースとしての利用があります。水路を利用した空間に人々が集まり、新たな交流の場となります。また、水路の近くにバケツを設置することで、初期消火や防災へのサイン等に利用します。バケツは水を入れるだけでなく、ひっくり返すとベンチとして利用できたり、地区ごとに異なる色やデザインのバリエーションがあったりと、住民と共に観光客にとっても受け入れやすいものになっています。水路とバケツは地域に新たな風景を生み出します。

住民と観光客が集う場所



インクラインを住民と観光客の交流拠点とします。移動式店舗を利用し、食べ物やお土産物など、地域の特産物を販売します。店舗はつなげるとステージにもなり、地域の演奏会や発表会を行うイベントスペースとして利用できます。また、案内所を設置することで、観光案内とともに地域の情報を発信することができます。災害時には、住民だけでなく、水路に沿って避難してくる観光客を受け入れる避難拠点となります。普段からインクラインに足を運ぶことで、いざというときに集まりやすい場所となります。

水路とバケツが教えるにげ道



観光地に新たな水路を引くことによって、避難経路の役割を果たします。水路がすべてインクラインの方へつながるように設計することで、水路の流れる方向に進めば、避難拠点であるインクラインにたどり着けるようになっています。また、歴史的建造物のそばにはバケツを吊るします。バケツには、お店の情報や蹴上地区周辺でのイベント情報を記載するとともに、そのお店が避難場所として利用できるかどうか記載してあります。災害時にはこのバケツを水路のそばに置くことで、水路に行けば必ず避難できる環境が整います。